

熱帯アジアを掘る

—第13次アンコール調査における考古班学生現場研修報告、カンボジアの経験から—

丸井雅子

第13次アンコール遺跡国際調査は、1994年7月31日（日）～8月22日（月）までの23日間にわたり実施されたが、分野別調査の中で人材養成プロジェクトは7月31日から8月19日まで約3週間行われた。

今回のプロジェクトは、プノンペン芸術大学考古学部より7名の学生（男性5・女性2、うち男子学生1名は第11次調査において実習を受けた学生である）と芸大教官2名を迎えて、アンコール遺跡群の中のバンテアイ・クデイ遺跡（12世紀末—13世紀初め）及びアンコール・ワット西参道環濠陸橋（以下、本文では単に西参道と記す）にて実習を行った。考古発掘は藤田幸夫（大阪市文化財協会）・杉山洋（奈良国立文化財研究所）・丸井、遺跡検分と現地における歴史分野講義は石澤良昭（上智大学）、地質分野では塚脇真二（金沢大学）が、それぞれ担当した。土曜日は午前のみ実習とし、日曜日は遺跡検分と目視調査に出かけた。実習時間は原則として、午前は7時半から11時半、午後は2時半から5時とした。参加学生のほとんどが野外における考古実習未経験者であったため、実習期日の前半は各器機を用いての基本的な測量練習等を行い、後半は実際に発掘作業を行って発掘の行程を把握することに努めた。学生による作業は、考古班調査のそれと明確に区別されるものではないが、ここでは実習の教育過程を中心に以下記していく。

1. アンコール遺跡保存修復の人材養成意義

カンボジアでは1975年4月から約4年間にわたるポルポト時代において、多くの行政官・技術者・研究者など国家建設に携わってきた人材を

失ってしまった。特にアンコール遺跡に関していえば、1970年段階でアンコール遺跡事務所には作業員から中級レベルの技官まで約970名が働いていたが、1979年9月に戻ってきた旧職員・作業員は約70名であった。保存官（コンサヴェイター）は約40名いたが、職場への復帰者は3名にすぎなかった。アンコール遺跡はその規模が壮大で地域も300平方キロに及び、約500年にわたって建造された遺跡が50箇所（文化遺産登録文化財）にのぼっている。これら遺跡の多くは年月そして混乱の時代を経て破損が進み、その修復や保存が急務課題として叫ばれている。調査団による人材養成は、一連の保存・修復事業を執り行うカンボジア人保存官の必要性から行われ、1991年3月から実施されている。これまでに、プノンペン芸大における集中講義とシェムリアップ州での現場研修を継続して行ってきた。

2. 第13次調査における人材養成プロジェクト（1994年7月31日～8月19日）

実習カリキュラム及び実習項目

第1日：目視調査：7月31日（日）

7名の学生及び芸大教官2名へのガイダンス。石澤教授引率による目視調査実習及び講義（その1）：午前、Angkor Wat, Bayon 午後、Baphoun, Phimenakas, Thommanom。引率者の説明に対して、学生はメモを取ったりカセットレコーダーで録音するなど非常に熱心である。午後は、小雨混じりの見学となりトマノム辺りで本降りとなったため終了。

第2日：平板測量実習：8月1日（月）

午前、バンテアイ・クデイ前柱殿南側にて、学生に対して石澤教授よりクデイ遺跡とこれまでの調査の説明がなされた後、藤田氏より今回の発掘の目的と本日実習の内容が伝達されて、学生数名とともに今回発掘トレンチの設定。このトレンチは11次調査において確認されたラテライト基段（西北角）に続く東北角を調査する目的だ掘られるものである。11次発掘Aトレンチから東へ6mの地点から、東西4.5×1.4(m)。これを13次Aトレンチとする。地元作業員による粗掘りと並行して、学生を平板実測（11次発掘区と今回発掘区）のグループと11次発掘区の沈下部（10cm前後）を均す作業のグループとに分けてそれぞれ作業を行う。午後、作業前に簡単なミーティングを行い午前中の平板実測において問題と思われたことを述べた。その後、中央祠堂ラテライト壁の観察。これは藤田氏から学生に出された課題。40分ほどの各自観察の後、全員で気付いた点を指摘し合った。ラテライトのつみ方に関して多く意見が出された。

第3日：地質・石材調査と実習：8月2日（火）

午前、バンテアイ・クデイにて作業員は昨日設定のAトレンチを南へ拡張作業。学生は、塚脇氏による石材に関わる講義を受ける。バンテアイ・クデイの前柱殿に用いられている砂岩の性質及び砂岩に含まれる情報の読みとりなど。又、砂岩とラテライトそれぞれの体積からひとつのブロック一個の重量を計算し、既に崩落している同量のブロックを何人で運ぶことができるかを試した。その結果、頻見するサイズ（70×40×20cm）の砂岩一個（比重=2.5, 122.5kg）を運搬するには少なくとも5人が必要とされた。前柱殿そのものも地質の視点から観察できることが数多くあり、また建設工程を推測できるという点に学生強い関心を示していた。昼前、前柱殿内の建

築班作業の見学、永井氏から前回の測量値と今回のそれとの差異について説明を受けた。午後、Aトレンチ拡張域の平板実測。途中雨のため、4時頃仕事終了。

第4日：簡易測量：8月3日（水）

今日から数日はアンコール・ワット西参道にて仕事。西参道北半分では、修復工事の予備調査として建築・地質・考古の各班により共同発掘調査が行われる。午前、石澤教授より西参道に関する講義の後、考古班は先ず参道北面下の環濠部分に下りる。雨期ではあるが、壁際より7~8mの範囲まで土が露呈し水が引いている。藤田氏はラテライト壁際にトレンチを設定、掘る。学生、参道のラテライト壁をポールと水糸を用いて簡易測量。午後、午前の作業を続ける者と、トレンチの平板測量をする者に分かれる。トレンチは30cm程掘り下げた部分で水が涌きだした。4時頃から雨降り続け、作業やめ。

第5日：簡易測量及び平面図作成：8月4日（木）

アンコール・ワット西参道にて、午前、昨日の日誌を各学生から提出してもらい、これまでの作業に関する質疑応答。西参道上に、水糸を張り砂岩敷石を簡易平面測量。それと並行して、参道で既に掘られていたトレンチを見学、その地層（ラテライト敷きの下）を観察した。午後、砂岩敷石の平面測量を継続する者と、参道下濠にてトレンチの平面図を書く者に分かれて作業。3時半頃から雨、木の下で雨宿りしながらミーティング。

第6日：平板測量及びレベリング、ヴァン国務大臣閣下視察：8月5日（金）

アンコール・ワット西参道にて、午前、昨日の雨をトレンチから汲み出す作業の後、参道上トレンチの平板測量及び参道下濠トレンチの平面図を書く作業に分かれる。午後、レベル測定の説明を行った後、参道上のレベリング。3時近くに、ヴ

アン (Vann) 大臣およびボラット (Borath) ご夫妻一行来。学生とも懇談し、各自実習の内容を述べる。大臣が帰られた後、参道下のトレンチのレベリングするために参道上からレベル移動を行った。レベル移動の意味などを学生に説明するのに時間がかかり、実際の作業は大急ぎで丸井がやってしまった(案の定、その日の実習日誌には「何をやったのかよくわからなかった」という声があり)。下トレンチのレベリング終了。

第7日：建築班実務見学：8月6日(土)

アンコール・ワット西参道にて、午前、参道上トレンチの埋め戻し。小杉氏指揮による埋め戻し作業を見学。このトレンチは、現在も人々が往来する参道上に設定したものであるため、いかに元通りに復元していくかを観察・記録した。途中、ヴァン大臣再来。学生に講話。本日は学生の実習は午前のみ。*夜、学生の宿泊先にて夕食会を開く。これは小杉氏のご援助による。子豚やあひるの丸焼きをビールと一緒にいただき、大いに盛り上がった。

第8日：目視調査：8月7日(日)

午前、石澤教授引率による遺跡目視調査実習(その2)。通称大周リルート。Preah Khan, Ta Som, East Mebon, Prey Rup。プリア・カーンにおいては、サイト・ミュージアムの一例を実地に学ぶ。

第9日：ヴァン大臣視察および極東学院現場見学：8月8日(月)

午前、バンテアイ・クデイにて、Aトレンチ内ラテライトの輪郭出しおよび出土土器の洗浄。9時、ヴァン大臣一行来。調査団員はもとより学生各々に詳細なコメントを求められ、結局大臣は午前中一杯我々とバンテアイ・クデイで過ごされた。午後、学生と丸井はアンコール・ワット参道下のトレンチ埋め戻しを行う。土曜日に参道上トレン

チの同作業を見学していたため、学生だけで手早く済ませることができた。4時からバイヨン内ライ王テラスにて、ヴァン大臣とともにフランス極東学院パスカル (Pascal Royere) 氏による保存修復の現状について説明を受ける。5時半頃終了。

第10日：学生主体のトレンチ発掘開始：8月9日(火)

バンテアイ・クデイ、午前、学生2名はAトレンチにて掘り下げなどの作業。他は、新しいトレンチを設定に取りかかった。このトレンチは、Aトレンチで既に確認されたラテライト基段(東北角)の続き(東南角)を見つける目的と、学生が今まで見てきた発掘の各作業を実践するため、設定するものである。トレンチの位置決定から、掘り下げや記録など全てを学生に任せることにする。午前中はどこにトレンチを設定するかの相談に終始した。午後、東北角のラテライト基段より南に6mほどの所にトレンチ(2×1.4m)を設定することに決める(Bトレンチ)。が、3時頃作業はじめてすぐ雨。

第11日：トレンチ掘削作業及び平板測量：8月10日(水)

バンテアイ・クデイにて、午前、Aトレンチ(更に拡張)とBトレンチの平板測量に2名。他は、Bトレンチにて作業。Bトレンチはラテライトブロックが上層に絡んでおり、深くは掘り下げられない模様。東半分からは、かなりの数の瓦片が出ている。午後、Bトレンチで現在見えているラテライトは、高さからみても目的の基段とは別の建物(おそらく南に残るラテライト建物に属するか)に関わるものと考えられる。学生は、東南角のラテライトを見つけることが出来なくてやや落胆の面もち。このラテライトを取り上げることはせずに、現状のまま記録をとることに決める。3時半頃より雨、終了。

第12日：写真撮影及び平面図作成：8月11日（木）

バンテアイ・クデイ、午前、作業前に藤田氏より訓示。Bトレンチは、当初掲げた目的をはずした結果となったが、考古発掘が「宝探し」ではない以上このBトレンチを最後まで責任を持って調査すること、即ち客観的な記録を取り埋め戻し完了まで行うように、との話しがなされた。学生は、Bトレンチ写真撮影のため、清掃に取りかかる。根切りに四苦八苦。学生一人、Aトレンチにて藤田氏の平面測量助手。午後、昼休みに市場にて購入した斧と植木鋏を使って、写真清掃の続き。ヌット・ナラン大臣ご夫妻、ウ・ボン所長（アンコール遺跡事務所）一行来。

第13日：写真撮影及び平面図作成：8月12日（金）

バンテアイ・クデイ、本日から奈文研の杉山氏参加。午前、9時すぎBトレンチ写真撮影終了。水糸を使って平面図。丸井が、スケール1/20と伝えてしまったので、できあがり図面がかなり小さくなった。午後、スケール1/10で再度やり直し。他は、杉山氏指揮のもとAトレンチの掘り下げ作業及び図面作成の補助作業に従事。

第14日：平面図作成：8月13日（土）

バンテアイ・クデイ、Bトレンチは、引き続き平面図。既に西参道上の砂岩敷石において平面図の略測を練習したが、かなり困難をきたしている模様。この日も午前のみで実習は終了。

第15日：目視調査：8月14日（日）

午前、石澤教授引率による遺跡目視調査実習（その3）。Roluos(Bakong, Preah Ko, Lo Lei)。バ・コン及びロ・レイでは、現代の寺院が隣接するいわば生きた遺跡を学ぶ。 ＊夕方、プノンペン芸大学生チーム対アンコール調査団チームのサッカー親善試合が行われた。結果は0-2。試

合終了後、サッカーボールは学生チームにプレゼントされた。

第16日：平面図作成及びレベル移動実習：8月15日（月）

バンテアイ・クデイ、午前、Bトレンチは、平面図終了後レベリングを行った。学生4名はレベル移動復習のため、東塔門側のE F E Oによるポイントから前柱殿南東角のポイントまで移動を行う。他は、Aトレンチにて作業。午後、レベル移動の続き。2往復しても数値の誤差が1 cm以上である。原因は箱尺の持ち方と数値の読み方にあると藤田氏より指摘。同メンバーにて再度レベル移動に取り組む。4時雨。

第17日：レベル移動：8月16日（火）

バンテアイ・クデイ、午前、昨日の作業から気付いた点をいくつか取り上げ、更にレベル移動の仕組みなどをまとめたものを作成し、朝の作業前に配布した。昨日と同メンバーにてレベル移動。一方、Aトレンチでは写真撮影終了し、北面セクションにはまっている砂岩の刻文を拓本に取る作業。午後、作業分担を交代して、レベル移動を又行った。3時半過ぎひどい雨、止まず。 ＊杉山氏この日で最後。

第18日：土層観察：8月17日（水）

バンテアイ・クデイ、午前、Aトレンチ東側セクションの土層説明。位置や含有物の違いによって前柱殿およびトレンチ内ラテライト基段等との関係が説明づけられる。北面の砂岩取り上げ作業。取り上げ後、土に隠れていた部分にもう一文字見つかるとのこと。学生は、古クメール文字を履修しているとのことで、刻文をアルファベットに直した。Bトレンチ埋め戻し始める。Aトレンチも埋め戻し開始。昼頃ひどい雨降り、午後は小雨混じりの中で埋め戻しを続行。

第19日：発掘実習最終日及び採択：8月18日
(木)

バンテアイ・クデイ、午前、Aトレンチは引き続き埋め戻し。学生は、昨日取り上げた砂岩の刻文を乾拓にて写し取る作業。実習最終日のため、バンテアイ・クデイ内の自由探査とし、実習は午前で全て終了とする。午後、Aトレンチ終了。作業員3名と記念撮影、握手。今回作業に用いた道具を、前回同様運転手氏の家にて預かってもらうこととする。＊夕方、実習日誌と感想を受取に丸井は学生のゲストハウスへ行く。ビールをご馳走になり、お土産にクロマーをもらう。

第20日：考古班調査最終日：8月19日(金)

考古班、学生、シムリアアップ離日。プノンペン芸大着。

3. 学生アンケートとその問題点

1) 今回のプロジェクトでは、学生には実習日誌と感想などを毎日提出してもらった。実習日誌は、その日指導した実習内容に対する理解の度合いを確認するため、また実習時間は実務作業に追われて学生との質疑応答あるいは率直な感想を聞く時間が持たないことが多いために、自由な意見を述べてもらう場として日誌の提出を求めた。考古班が用意した用紙はA4サイズを1日1枚としたが、皆小さな字で詳細に記録を行っていた。

2) 実習日誌に関して、指摘しておく。日誌の内容は、全ての学生が実習事項の列挙であった。用紙配布時には敢えて何も助言をしなかったが、「どういう目的によってその作業を行ったのか」あるいは「発掘作業によって(学生本人が)得た遺跡に関する新知見」等に言及されていれば尚よかったであろう。これは発掘調査の経験とも比例するが、毎日の調査経過などを記録することによって、発掘のプランニングへ自ずと理解が進むと考えられる。

3) 感想及び要望の欄にいちばん多く出された意見は、「石澤教授を初めとする調査団員による、各専門分野の講義が聞きたい」というものであった。これは、調査団として既に実施しているプノンペン芸大における講義にその役割を譲るものである。が、今回学生はこのように意思表示してきた。具体的には、アンコール遺跡群の歴史的な位置づけ、建築あるいは彫刻の様式、地域の土地の形成史そして自然環境の変化等が挙げられる。

4) 次に多く希望されたのは、具体的な修復・保存作業の方法を学びたい、という点であった。一刻も早く、成果の現れる作業を行いたいという学生の気持ちは十分理解できる。しかし、より効果的な修復・保存の事業を行うには事前の予備調査が不可欠であり、建築・地質・考古等各分野の調査成果の積み重ねがあつて初めて、修復・保存の事業に取りかかることができる。今回の実習では、特にアンコール・ワット西参道にて予備調査の経過を学ぶことが出来、非常に有意義であった、というような内容を学生に話した。また、次回もぜひ参加したい、というのは全ての学生の希望するところである。少しでも多くの学生に現地実習の機会を与えると同時に、より専門的な人材を養成するためには継続参加することが望まれる。この問題に関して学生に即答することは、非常に難しい。

4. 人材養成の成果と今後の問題点

—考古学専門領域からのアプローチ—

今回の13次調査を終了し、考古班人材養成プロジェクトの総括を行いたい。

1) 成果として挙げられるのは大きく分けて次の2点である。

①カリキュラムに関して

a. 学際的な共同調査を学ぶ：特に、アンコール・ワット西参道において、建築・地質・考古の3分野が実施した予備調査を実地に見学し、その調査

過程を観察及び記録する事が出来た。現場作業は、決して一分野が単独で行うものでなく、異なった視点と方法論を組み合わせかつ補い合いながら進めていくものであることを理解した。学生にとってこれは、教室で受ける講義からは得られない体験である。

b. 保存・修復事業の前提としての予備調査を理解する：上記、西参道の調査はまた学生に対して我々調査団が何故長時間を費やして綿密な調査を実施しているのかを、教えている。それは保存・修復事業というものが、単に実際に関わる技術だけの問題に留まらず、時間・空間の広い次元にまたがった問題をはらむ、ということを示す。また、バンテアイ・クデイにおける考古発掘調査は、近い目標として今回はラテライト基段（東北角）の確認が掲げられていたが、より大きな目標には地下構造の調査とそれらの編年が設定されている。バンテアイ・クデイでは第13次調査Aトレンチの土層観察により、前柱殿建設の時間的な前後関係に関わる基礎地業がある程度推定できた。この成果は、やがて建造物を修復する際に、建設時の形状をできる限り受け継いで保存・修復を行うという本調査団の方針に生かされてくるのである。

c. 発掘の過程を計画する：今回、バンテアイ・クデイでは実習10日目より学生主体の発掘区を設けた。区域としては非常にせまいトレンチであったが、先ずトレンチをどこに設定するかという時点で学生は、何のために掘るのかという問題意識に立ち戻ることが出来た。更に発掘過程を一連の流れとして把握できた。皮肉なことに目的としていたラテライト基段（東南角）が確認できなかったことにより、かえって考古学の発掘がどういうものであるのかより明確に認識したのではないだろうか。

d. 各遺跡・現場の目視調査：実習期間中計3回実施された石澤教授引率による目視調査は、各遺跡においてそれぞれの歴史的背景及び建築・美術様式の講義を受けることが出来た貴重な経験であっ

た。学生は、多くの現場を経験することによって、自分達の実習の場であるバンテアイ・クデイ遺跡及びアンコール・ワット西参道と、他との違いを比較する機会を得た。また、地域という枠組みからアンコール遺跡群をとらえる契機となったのではないか。

②研修プロジェクトの波及効果に関して

1988年以来継続されてきた人材養成プロジェクトは、ここにきて大きくその成果が見え始めている。

a. これまで4年間アンコール調査団の実習を受けたプノンペン芸大考古学部卒業生2名が、1994年10月から12月の約3ヶ月間、奈良国立文化財研究所にて研修を受ける運びとなったことが挙げられる。

b. 日本留学は学生に大きな希望を与え、やれば認められ、将来も開けるといふ一つの証明となったといえよう。そうした指導上の波及効果が大きい点を指摘しておきたい。

2) 問題点が無いわけではなく、次の点を指摘したい。考古班の人材養成プロジェクト特に現場実習は考古班調査と全く切り離して実施することは不可能であり又それは無意味でもある。が、プロジェクトのプラン作り自体は別個に綿密に作成する必要に迫られている。それは実習期日中のカリキュラムに関わることでもあるし、かつ実習期日以外の普段の学習に関わることでもある。

例を挙げるならば、普段の学習においては既存の発掘報告書数種に目を通し発掘によって記録するデータは何か、といった点に慣れることも必要かと思われる。又、調査団は発掘によって出土した遺物に関して全て現地に残し、保存することを方針としている。実習後の整理作業として実習生がそれら遺物の整理作業に携われるような体制が出来るとよい。

今回実習指導に際して予想外だったのは、説明に多くの時間が費やされてしまったことである。

学生は、機器の使用法といったことから測定の理論（レベル移動のしくみ）などに至るまで、自分達の納得の行くまで理論的な説明を徹底的に求めてきた。「習うより慣れろ」という風潮で発掘現場を経験してきた筆者にとっては、意外な事態であった。

確かに、日本のように多くの発掘現場を恒常的に有するところでは、発掘調査を積極的に希望する者（学生）は多く経験することで自ずと理解が伴われることであろう。しかし、ここカンボジアでは事情が大きく異なる。先ず頭で理解しておかないと、慣れる場が無いのだから。但し、考古発掘を今後も続けていく上では、時間をかけて思慮すべき問題と習慣的に短時間で処理しなければならない作業とがあることを、はっきりと認識しなくてはならないだろう。

以上の点が今後検討すべき課題として残された。

3) まとめにかえて

—カンボジアにおける考古学人材養成—

考古学という専門領域に限って、人材養成プロジェクトの意義と展望を次のように提示したい。

①保存・修復を支える柱としての考古学：

「カンボジアの人々による主体的な保存・修復事業」は我々調査団が当初より掲げてきた目標の一つだ。考古学の専門領域において、カンボジア人の専門家を育てようとしているのも、まさにこの為である。ところで、考古学という学問の概念及びその調査方法・方法論は、国や地域によって大きく異なる。当然、カンボジアにはその歴史・風土に見合ったカンボジア独自の考古学が確立されるべきだ。今、カンボジアにとって、文化遺産の保存・修復事業を遂行するための人材養成が急務課題であることは明確であり、そこにどれだけ寄与できるかが、先ずカンボジア考古学の課題であるといえよう。何故なら、いかなる学問成果も、現代社会になんらかの形で生かされなければならないから。

②カンボジアにおける人類史解明の一手段としての考古学：

一方で、考古学は決して他の学問の補助学ではないと考えたとき、考古学の基礎研究も専門家としては不可欠な要素である。カンボジアには、これまで先史時代に始まり歴史時代にいたる多くの遺跡・遺物が確認されているが、長く続いた混乱のためにそれら貴重な考古資料がカンボジアの人々自身によって整理されることは殆ど不可能であった。

そこで、過去に記録された外国語による報告書をカンボジア語に整理し直すこと、また将来発見されるであろういかなる時代のどのような種類の遺物・遺構にも対応できる基礎知識の蓄積を目指すことも重要であろうと考えられる。

我々調査団が現地実習において学生に学んでほしいのは、単に技術や知識だけではないのはいままでもない。実際にその地域に生活し、環境を知り、土地の人々の理解と協力なしには調査・発掘はできないという実感である。

最後に、これは13次調査における現場実習の補助者の立場からまとめた報告であることをお断しておく。

この場をかりて、機会を与えてくださった上記の諸先生方にお礼を申し上げたい。